

# 風土記の丘の花だより<sup>263</sup>

今、そしてこれから見られる植物(2024年11月30日)

いつも花だよりをご覧いただきありがとうございます。やっとイロハカエデも色づき、晩秋を実感する季節になりました。さて突然ですが、誠に勝手ながら、都合により12月からしばらくの間、花だよりの発行をお休みさせていただきますので、悪しからずご了承ください。



ナンテンの実が赤く色づいてとてもきれいです。この写真は谷村家住宅で撮りました。昔は縁起をかついで「南天」に「難転」の字をあて、家の「鬼門さん」に植えたものです。家に入ってくる災いを防いでもらおうという願いからです。でも、今ではそんな風習も少なくなっていることでしょうか。いろいろな品種があり、実の房が垂れずにまっすぐ立つものや、実が白いものなども見られます。枝の断面は黄色で、切ると独特の香りがします。



小型のブドウみたいです。サネカズラ、別名ビナンカズラの実です。観察しやすいところは、新池の西のツバキの木で、つるが巻き付き、見上げるとくさんの実がなっています。今年は例年になく数は多いのですが、色がどうもよろしくありません。これも異常気象のいたずらなのでしょう。ツルは枝分かれが多く、下の方で分かれても、また上の方で絡み合うことから、万葉集では、男女が一度別れても、またいつか会えますね、というような歌の中に詠まることがあります。



花が少ないので、実が続きます。ブドウの次はトウモロコシみたいです。寒くなってくるとさらに赤くなります。



これはウラシマソウの実です。頭の割に茎が軟弱なので、倒れてしまっています。4月頃、写真のような一種独特な花を咲かせますが、この花から、この実は想像しがたいですね。散歩の途中で見つけ、ビックリされるのか、スマホを見せて「これはなに？」とよく尋ねられます。



最後も赤い実を紹介します。これはサルトリイバラの実です。このあたりでは、端午の節句の「柏餅」をカシワの葉ではなく、この葉で包み「さんきらい」という名で親しまれています。それでお馴染みの植物ですが、実が付いている株と、いない株があります。この植物は雌雄異株で、実は雌株にだけ付きます。茎には刺が多く、この草の中にお猿さんが逃げ込んだら出られなくなることから、「猿獲り茨」ですが、まさかそんなこともないでしょうね。松下